
ここから始める

ギア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ここから始める

【Nコード】

N3971R

【作者名】

ギア

【あらすじ】

死神の俺に、心など存在しない。そこで、自殺しようとしている不思議な少女に出会う。

死神の彼が、無くしたはずのものについて、気づかされる話です。

（前書き）

この話はある死神の話です。

この話は、「竜の血」とつながれようと思っています。

時計の針が鳴っている。カチカチカチカチ。
その音が鳴るたび、一つ、また一つと消える。

だがどうでもいい。自分さえ助ければ、誰が死のうと誰がわめこう
と知った事ではない。

俺に心など存在しないから。

だから。

皆俺の事を死神と呼ぶ。

死の神。

死の使い。

高いビルの屋上に俺は立っている。

もう真夜中のせいか、人の気配はない。

「死にたいなら早くしろ。」

俺は今にも飛び降りそうな少女に言った。

すると少女は俺の存在に気づき、目を見開いた。

驚いたようだ。

だがそれも少しの間だけ。

「あなた死神？」

少女は微笑みながら言った。

やはりこの少女も俺のことを死神と呼ぶ。

「お前がそう思うなら好きにしろ」

これから死ぬやつに興味などない。

冷たく俺は言い放った。

すると少女は、

「あなたが死神に見えたの、何でだと思う？」

と、問いかけてきた。何なんだ、いきなり。

だが俺は答えない。大体予想はつくからだ。

「今日、満月なのよねえ。だから今日に決めたのだけど、

君が来た。なんかね、満月がすごく似合ってて…きれいだなと思ったの。

それでね、名前、死神にしちゃた。こっちのほうがかっこいいでしょ？」

どう？とばかりに聞いてくる。

「俺は・・・嫌いだ」

仕方なく答えたが、少し言葉に詰まった。

以外だった。今まで、きれいとか言われた事がなかったからだった。

真夜中のせいかな、それとも死神の俺のせいかな、風がいつもより冷たかった。

少女は俺を見つめ、やがて、

「死神さん。私、死んだらどうなるの」

微笑みながら聞いてきたが、俺には悲しそうにも見えた。

「死ねば分かる」

少し、胸の奥が痛くなったような気がしたが、気のせいだと思う。

すると少女はフフフと笑う。俺はそれを見つめる。

もうすでに感情のなくなった灰色の瞳で彼女を見つめる。

何故か目が離せない。

「・・・どうして死にたいと、思うんだ」

少し、本当に少し、疑問に思っただけだ。

すると少女は言う。やはり微笑みながら、それでいてどこか悲しうに言う。

「つかれたのよ」

そのたった一言の言葉に、たくさんの思いが詰まっているのが分かった。

月の光が彼女のきれいなピンク色の髪を照らしている。

「そうか」

少しでも、俺がこれから死ぬヤツに興味をもったのはこれが初めてだった。

月明かりに照らされていた彼女の髪が冷たい風でなびく。

「死ねば楽になれるかな？」

少女はまた聞いてきた。今度は今にも泣き出しそうな顔だった。

その言葉にそれは間違いだ、と、言おうとしたがやめた。

そんな事を言えば目の前の彼女は泣き崩れてしまいそうだったからだ。

だから、俺は考えた。さっきまで即答で答えていたが、今度は何故か上手くいかない。

こんなこと、数え切れないほどあったのに。

「…さあな。」

すると少女は、また泣きそうな、嬉しそうな、なんともいえない表情で。

「知ってるくせに」

続けて言う。

「でも、ありがとう。死神さん。やさしいのね」

その言葉を言ったときも、彼女は嬉しそうに微笑んでいた。
本当に嬉しそうな顔。

これから、誰からも止められずに死んでいくというのに。

俺は死を待ち、死を誘い、訪れるとハイエナのように食らう。

だから優しいという言葉は間違いなのだ。

それを彼女もなんとなく理解しているはず。

なのにそんな俺を彼女は優しいと言った。

「お前、名はなんと言っ」

何故かその言葉が出てきた。自分でもその理由が分からない。

「美月^{みつぎ} 時越^{じえつ}1」

時を越える。苗字も名前も美しかった。

「いい名だな」

本当のことを言う。

「それも今日でおしまいね」

時越は空を見上げながら言った。

しばらくすると、時越は覚悟を決めたように、それでいて穏やかな表情で最後に言った。

「最後にあなたと話せてよかった。じゃあね。やさしい死神さん」

そっとうと彼女は跳んだ。彼女の跳んだ先は空。

足場など存在しない。

思わず何も考えずに、待て、と言おうとしたが遅かった。

彼女の体は重力に逆らおうとせずに落ちていく。

何故か胸が痛み出した。

そして、それが何を意味しているかを知ったとき、初めて気づいた。

もうとつくに無くしたはずだったもの

死神の俺にも『心』があつたことを。

カチカチ。時計の針になる。それは死の時計。命の時計。

ちょうど、短い針が夜中の12時を指した。

カチカチカチカチ。

また一つ、命が消えた。

（後書き）

前書きでも書いたとおり、「竜の血」につなげるつもりです。

知らない人がほとんどだと思うので、よろしければ見て行ってください！

感想、お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3971r/>

ここから始める

2011年10月8日20時09分発行